

ヤンの有用性が再確認された。

脾の欠損像のパターンによる診断は、他の有力な臨床情報が無ければほとんど不可能であった。しかし、今回経験した脾原発の Reticulum cell sarcoma や Amyloidosis では、脾腫と瀰慢性の activity 減少が認められ、浸潤性に脾の構築を破壊する病変の存在が示唆された。

脾の局在性病変の頻度はまれで、かつそれによる臨床情報が少ないため、生前の診断は困難であるが、日常核医学検査の中でも最も頻繁に行なわれている検査の一つである肝シンチグラフィ施行時に、脾の辺縁の不整さや、activity の減少領域の存在に十分な注意を払い、脾の局在性病変の検出に努める必要があると思われた。

17. 興味ある経過をたどった胃癌の肝転移シンチグラムの1例

沢田 宣久 小林 剛
石井 勝己 中沢 圭治
依田 一重 山田 伸明
松林 隆

(北里大・放)

原 伸一

(同・外)

胃癌に肝転移を伴った症例の予後はきわめて悪く、ひとたび肝に転移をみればきわめて短期間内に患者を死に至らしめるものである。われわれの経験でも、胃癌をはじめとする消化器癌で、多発性の肝転移を伴った症例の予後は不良である。胃癌に限って見ても、当院の肝両葉に多発性の転移を認めた場合の予後はきわめて悪く、過去2年間の経験では、10例中8例が平均2か月で死亡し、残り2例は、抗癌剤の使用で肝シンチグラム上の cold-area が縮少したり、増大を抑制されたりしても消失することはなかった。今回われわれは胃癌患者において、抗癌剤の治療経過とともに臨床症状、一般血液化学、CEA 値が改善され、それとともに cold-area が消失し、肝の縮少もみられ、

それが腹部 CT でも裏づけされた胃癌肝転移の1例を経験したので報告する。

18. 切除肝の肝シンチグラム

古井 滋 町田喜久雄

西川 潤一 田坂 皓

(東大・放・中放)

当院で1971年から1978年に肝切除を行なった症例のうち、術後2回以上肝シンチグラムを行なった8例を対照に、前面像側面像での肝の形、面積の経時的な変化について検討を行なった。

症例は男6例女2例、年齢は55歳から66歳、病理診断はすべて肝胆道系の悪性腫瘍で、術式は右葉切除2例、拡大右葉切除1例、右葉 Anterior segmentectomy 1例、左葉切除3例、左葉 Lateral segmentectomy 1例である。シンチグラムで Follow up できた期間は2カ月から29カ月、術後一番早くシンチグラムを施行できたのは13日目だった。

結果として、(1) 右葉切除群では再生肥大が著明に見られたが、左葉切除群ではあまり見られなかった。(2) 両群とも Follow up 期間中の肝の形の変化はほとんど見られなかった。(3) 右葉切除群では主な再生肥大は術後1か月以内におこったと思われるが、その後も術後6か月以内は前面像および側面像肝面積の増大傾向が見られた。

(1) については手術時の肝切除量の違いが主な原因と考えられる。(3) については今回は肝シンチグラム前面像および側面積を用いて検討を行なったが、この面積は肝の体積だけでなく、位置の変化回転なども反映していると思われ、今後肝の肥大再生を検討する場合、肝シンチグラムとともに CT scan が有効と考えられる。